

日本古代の文学を研究する者にとって、今回のシンポジウムのテーマ「文学における多文化受容の問題」をま正面から取り上げるのは、いささか難儀なことと、まずは言い訳からお話しを始めなければなりません。と申しますのは、ご存じのとおり、日本の古典文学は古代中国や朝鮮半島の文化から多大な影響を受けています。そしてそれら大陸の地域には様々な民族の様々な文化が花開いています。また日本列島内でも、ヤマト政権とは異なる文化圏の文化が各地にありましたから、それらを受容した日本古代の文学のあり方を考えることが、「多文化」受容の様相を考える、ということになるのでしょうか。しかし、それをするには、残された資料があまりに乏しい、という問題があります。

けれども一方で、日本文学が他文化から受容したものが、その後どのように日本文学、ひいては日本文化の中に組み入れられていったのか、ある程度長いスパンで追跡、検証することができるのが古典文学研究者の利点なのだとも思います。ということで、今回はそのような一例を示して、シンポジウムの一助たらんことを志すものです。

奈良時代以前から平安時代にいたる日本古代の文学を考えると、よく言われるように、現代にまで通じる日本的な美意識のかなりの部分が古今和歌集においてすでに現れていると見ていいと思います。たとえば季節のうつろいに敏感で、天候・気象のことを日常の挨拶にもしばしば用いるというよく知られた日本人の性格は、古今和歌集の、様々な歌の中から季節の歌を一つのジャンルとしてまとめ上げ、四季の部とし、時間の進行に沿って季節の微妙な移り変わりをおこなしている、というところと通ずるものがあるでしょうし、またたとえば、今年、2002年の春は桜の花が例年になく早い開花で多くの人の心をやきもきさせたのですが、そのような心は、在原業平の有名な、

世の中にたえて桜のなかりせば春の心はのどけからまし (古今和歌集春上53)

のそのままであったと感じられました。その他、松や鶴や亀に長寿の祈りをこめたり、暮れる秋に悲しみを感じたり、といった生活に関わる感性はもとより、懸詞や同音異義語をおもしろがる、という文学的な趣味まで、古今和歌集に現代と共通するものの多いことは今更申し上げるまでもないことと思います。

ところで、このように現代日本人の感性の一つのルーツと見られる古今和歌集の歌風が形成されるに当たって、中国文学が大きな影響を与えていることも、既にご存じの通りです。はやく小西甚一氏が、古今集的表現の特性を「対象とまっすぐに感合せず、知巧的な「はからい」に迂回してゆく把握態度に在る」と捉えられ、その成立は「唐風全盛期における平安詩人の六朝的「椅傍」が和歌に摂取された結果と認むべきであろう」と明らかにされた（「古今集的表現の研究」日本学士院紀要7巻3号 昭和24年11月）とおりであると考えられます。また、実際に日本の文学作品に影響を与えた中国文学の具体的な例は、小島憲之氏はじめ、多くの研究者によって明らかにされています。このように、現代にまで連綿と受け継がれている古今和歌集を中心とする日本古代の文学の特性がかたちづくられていくに際しては、他文化としての中国文学から、極めて大きな影響を受けていたことが明らかになっています。

このような研究史をふまえた上で、ここでは、日本古代の文学が中国の作品をどのように受け入れていったのか、そしてそれがどのように日本人の心の中に定着していったのか、あるいはしなかったのか、一つのサンプルをご紹介しますと思います。

ようやく本題に入るにあたりまして、一つのなぞなぞをご紹介しますと思います。ひょっとしたらご存じの方もおありかと思いますが、次のようなものです。

「氷が溶けると何になるでしょう。」

答えは「水」ではなくて「春」です。

いかがでしょうか。この答えを聞いて、得心がいかない日本人はほとんどいないと思われます。ところで、このようななぞなぞが日本において人々に受け入れられるという背景に、冷たい冬が終わりを告げて暖かい春になるとともに、固く結んでいた氷も融けて春の水が流れ始めるというイメージが、多くの日本人に共通して受け入れられやすいものであるということが考えられます。またたとえば、

春になればしがこもとけてどじよこだもふなっこだも夜が明けたと思うべな

(どじよっこふなっこ)

という童謡がありまして、最近はどうなのか確認はしておりませんが、従来ひろく子どもたちに受け入れられてきたものです。これが多くの子どもたちに受け入れられた、というのも同じ理由によるものと思われます。私もこの、春になれば氷が溶ける、ということをごくあたりまえの自然観として受け取っておりました。

ところが少し調べてみますと、どうやらこの感覚は日本人がその原初からおのずと持っていたものではなくて、平安時代になって中国文学から学んだもののようです。以下、このことについて少しばかり説明いたします。

10世紀の初頭に作られた古今和歌集の時代の歌を見ますと、

袖ひちてむすびし水のこほれるを春立つけふの風やとくらむ (古今集春上、紀貫之)

谷風にとくるこほりのひまごとにうちいづる浪や春のはつ花 (古今集春上、源当純)

水のおもにあや吹きみだる春風や池の氷をけふはとくらむ (後撰和歌集春上、紀友則)

雪の内に春はきにけりうぐひすのこほれる涙今やとくらむ (古今集春上、二条后)

春たてばきゆる氷ののこりなく君が心は我にとけなむ (古今集恋一、読人知らず)

みづなかにありこそしけれ春立ちて氷とくればおつる白玉 (貫之集四九八)

などのように、春の訪れによってとける氷を詠んだ歌を相当数確認することができます。

ところが、8世紀中頃に完成したらしい万葉集にはこのことを表現した歌は一首も見いだせないのです。もちろん万葉集の時代の人々も春の訪れには大いなる関心を持ち、歌にも多く歌っています。けれども、それらは、

春されば木末隠りてうぐひすぞ鳴きて去ぬなる梅が下枝に (巻五、八二七)

霞立つ野の上の方に行きしかばうぐひす鳴きつ春になるらし (巻八、一四四三)

ひさかたの天の香具山この夕霞たなびく春立つらしも (巻十、一八一二)

月数めばいまだ冬なりしかすがに霞たなびく春立ちぬとか (巻二十、四四九二)

のように、古今集以後も、そして現代にいたるまで、春を告げる景物として多くの人々に親しまれている鶯や霞の歌ばかりなのです。

これを先に示した古今時代の様相と比較しますと、氷の溶けることをうたった歌が万葉

集に見えないのは、単にそれが文字として記録されなかったためというのではなく、そのようなことを歌に詠むという発想そのものがこの時代にはなかったためだと判断する方が妥当性は高いと思われます。

さらに、枕草子の、池のある所の風情を述べた章段に

冬も、氷したる朝などは、いふべきにもあらず。 (枕草子 3 2 8 段)

と、「冬も（池に）氷の張った朝などはいうまでもなくすばらしい」と述べられているのを見ますと、現代と同様に——もっとも、最近では地球温暖化の影響でしょうか、京都大阪あたりではほとんど氷も張らなくなったようですが——、平安時代のみやこでも、冬の間ずっと氷に閉ざされているわけではありませんで、寒さの厳しい朝には池も氷るが、寒さのさほどでもない日には氷の張らないこともあるといった具合だったことがわかります。つまり春になると氷が溶けるのではなくて、春になると氷が張らなくなる、というのが古代日本において文学を製作し享受した都の人々にとっては自然の姿だったわけです。そういたしますと、奈良時代も平安時代とそうそう気候が変わるはずもないでしょうから、万葉の歌人たちが春になって解ける氷をまったく歌にしなかったというのも、そもそも日本人には春になると氷が溶ける、というような自然観自体がなかったためだと考えたほうがよさそうです。

さて、このように、万葉集の時代に見られなくて、古今集の時代になると急に現れる和歌の表現をもたらした要因として、かなりの場合、中国文学の影響が想定されるのですが、この春の解凍に関する同様のことが考えられます。すなわち、次に挙げます礼記月令の、

孟春之月、…東風解凍、蟄蟲始振、魚上冰、獺祭魚、鴻雁来。…

(春の始めである孟春の月に、東風、すなわち春の風が吹いて氷が溶け、虫たちがうごめきはじめ、魚たちも氷を破り、かわうそが魚を捕らえて並べ、雁たちも北の国からやってくる…)

という記述がこれらの和歌表現のおおもとになっているらしいのです。ただしこの礼記から直接に平安時代の歌びとたちが表現を学んだのだとは限りませんが、まず、この礼記月令の記述を利用した、多くの漢詩があります。たとえば、平安時代の日本人たちがとりわけ好み、その表現を和歌にも多く取り入れた白楽天の例を示せば、

柳無氣力枝先動、池有波文氷尽開。

今日不知誰計会、春風春水一時来。

(白氏文集 卷二十八 府西池)

(柳はなよなよと枝を揺らし、池にはさざ波が立って氷がとけ始める。春風と春水が一斉に来るなんて思いもしなかった)

風起池東暖、雲開山北晴。 氷銷泉脈動、雪尽草牙生。

露杏紅初坼、煙楊綠未成。 影遲新度雁、声洪欲啼鶯。… (同 卷十三 早春独遊曲江)

(春風が吹いて池の東は暖かで、雲が絶えて山の北は晴れてきた。氷は消えて泉は流れ始め、雪がなくなって草が芽吹き始めた。露を帯びた杏の花がほころんで、柳の枝はみどりにけぶる。漸く雁たちも空を渡り、鶯がしわがれ声で鳴こうとしている。)

など、礼記に由来する表現が、春をうたった詩にしばしば用いられています。また日本の漢詩人も、たとえば菅原道真の詩から引用いたしますが、

不潜南海重波下、将躍東風解凍初。…

(菅家文草 卷第三 在州以銀魚袋贈吏部第一郎中)

(南海の波の下に潜んでいずに、東風にとけはじめる氷の上に躍り出たい。)

などのように、礼記に由来する春の解氷の表現を学んで詩を作っています。このような漢詩世界でよく用いられた表現を和歌に用いたのが先に挙げた古今集時代の歌だったと考えられるわけです。そして、一々の例を挙げるのは省略しますが、それが平安時代以後も文学表現の中に生き続け、なによりも、初めに申しあげましたように、現代日本のわたくしたちにまでしっかりと受け継がれている、というわけです。

さて、次にもう一つ、同じく礼記の月令を典拠として日本古代の文学作品に取り入れられた表現をご紹介します。なおこれはすでに小島憲之氏の『古今集以前』に指摘されているものですのでそれによりましてごく簡単にお話をいたします。

典拠となりましたのは、

季夏之月、…蟋蟀居壁…

(礼記月令)

夏の終わりの月である六月になるとこおろぎが壁を這うようになる、という月令の記述です。これが、

…覚寒蛩近壁、知暝鶴帰籠…

(白香山詩後集 卷六 晩秋)

(秋口のこおろぎが壁に近いことに気づき、くらきに飛ぶ鶴が籠に帰ることを知る)

…繞壁暗蛩無限思、恋巢寒燕未能帰…

(同 卷十六 感秋詠意)

(壁に這うこおろぎは思いの限りを尽くし、巢を恋う冬燕は帰ることができない。)

などのように、白楽天などの漢詩に取り込まれ、さらに日本でも、

商飆颯颯葉輕輕、壁蛩流音数処鳴…

(新撰万葉集 上卷 八六)

(秋の風颯颯として、木の葉は軽々と舞っている。壁のこおろぎの鳴き声があちらこちらに聞こえる。)

秋来暝暮報吾声、蟋蟀高低壁下鳴…

(同 九〇)

(秋口の明け暮れに声を聞かせるように、こおろぎたちが高く低く、壁の下で鳴いている。)

のように、平安時代の詩人たちの世界に入り込み、そして、

虫の声々みだりがはしく、壁の中のきりぎりすだに間遠に聞きならひたまへる御耳に

…

(源氏物語 夕顔)

現在こおろぎと呼んでいる虫が平安時代の和語ではどうやらきりぎりすと言われていたらしいことはご存じの通りですが、礼記月令を由来とする表現が、このように、和文の作品にまで用いられるようになりました。

さてここまでは、先に紹介いたしました春に溶ける氷の場合とほぼ同じ経過を辿っています。けれども、その後の事情はいささか異なります。すなわち、蟋蟀が壁にいるという表現は、現代日本では通常用いられないのです。和歌のように平安時代の古典を志向した文学作品ですと江戸時代くらいまで確認できるのですが、それも明治期の短歌革新運動と共に消滅します。そして現在では、ほとんどの日本人にとって、こおろぎは野の草むらにいるもの、という感覚が通常と思われまふ。結局、一時は文学表現に受け入れられ普及した「壁の蟋蟀」という表現でしたが、しかしいつの間にか途絶えてしまって、日本人の感性に定着することはありませんでした。

平安時代の貴族にとっては四書五経の一つである礼記は、重要な意味を持つ書物でした。そのような書物に典拠をもつ表現ですから、春の解氷も壁の蟋蟀も受け入れやすいものだったと考えられます。それが、文学の主体が平安貴族ではなくなり、礼記という典拠も忘れ去られた時、春の解氷は残り、壁の蟋蟀は消えてしまったというわけです。

典拠を失ったときに消えてしまう表現と残る表現との違いは、結局その表現自体が日本人の感性に合っているかどうかの違いである、と説明することが出来ます。

別の言い方をすれば、春に氷がとけるという表現は古今を通じて日本人の感性に適合しているし、壁のおおろぎという表現は趣味に合っていないということがわかるのだ、という事もできます。そして、その「趣味」や「感性」とは日本文化の一面を示すものである、とも言えるでしょう。

さてここまで紹介したのは、儒教の経典の一つである礼記由来の表現がどのように日本の文学そして文化の中に受け入れられていったあるいは受け入れられなかったか、というサンプルでした。ところで、儒教といえば、日本のみならず韓国でも、その文化の形成に大きな影響を与えているものです。そして、もちろん中国でも同じことが言えます。もっと大きく申しますと、アジア全般に渡って中国古代の文化が様々な形でそれぞれの文化形成に影響を与えているわけです。ですから、たとえば今回ご紹介した例のように、ある儒教の経典の文句や表現がそれぞれの文化圏でどのような受容のされ方をしたのか、そして、現代の文化にどのように息づいているのかを考えていくことも、互いの文化を相対化して捉えていくための一つの指標たり得るものではないでしょうか。アジアの国々はそれぞれの文化の基盤に古代中国文化という共通の要素を持っているのですから、文学における中国古典文化の受容ということを手がかりとしてお互いの理解を深めていく一つのきっかけにもできるのではないかと、いささか夢のような事を申して、この話を終わります。